

# オオイタビによる胃石症の一例

## (A case Report on multiple Gastrolith which caused by phytobezoar from *Oëtabi*)

日本国立鹿兒島大學附屬醫院 第二外科  
中國台灣台北醫學院附設醫院 外科

朱 正吉  
秋田 八年  
廖 應隆

### (1) 緒言

胃石は動物の胃内で化学的或は物理的作用により異物がかたまつて形成される。胃石は腸内へ移して ileus を起こすこともある。胃石は髪胃石 (Tricho bezoar)、植物胃石 (phytobezoar) 及び兩者混合の髪植物胃石 (phytotrichobezoar) に分けられる。植物胃石はさらに纖維胃石 (Inio bezoar) 及び果實胃石 (opobezoar) に分けられる。

髪胃石はヒステリ、精神異常の患者によくみられるが、髪胃石と纖維胃石の場合の胃石の形成は植物の葉、莖の物理的な因子によつて作られる。Hamdi (1926) はこれを実験的に立証した。

しかし、果實胃石の形成は大量の果物の皮を呑みこみ、化学的因子的作用によつて胃石を形成する。果實胃石の代表的なものは柿胃石である。

著者らはオオイタビ (*Ficus pumila*) による胃石の一例を日本鹿兒島縣の奄美大島で経験したのでここに報告する。

### 〈症例報告〉

患者：手○廣○ 10才の男子

主訴：上腹部腫脹、嘔吐、右卜腹部特に臍周囲の痙痛。

現病歴：患者は1973年1月8日夕方臍のまみりの痙痛を訴えた。その晩嘔吐を繰返した。嘔吐物は主として食物殘存と膽汁であつた。嘔吐は漸次著明となつたので笠利國保診療所

を受診した。

現症：入院當時、腹部は中等度膨隆、腸蠕動を認められない。觸診では臍部と右下腹部で抵抗があり、同時に壓痛を伴う。臍部腫脹は境界不明瞭で、しかしこの腫脹は移動性あり、體位變化によつても移動があります。

入院時検査所見：便及び尿は正常であつた。血液像：Hgb 75%，RBC  $395 \times 10^4$ /cmm.，WBC 20600/cm m.

第一回目の術前におけるX線腹部単純ではイレウス症状の二ボが認められ、胃石は寫眞にはみられない。第二回目の手術前X線腹部単純では二箇胃石が胃内と腸内にみられた。寫眞工はこれを示す。

### 手術所見：

第一回手術(1973年1月8日)胃石は ileocecal valve から2メタの所に癒頓しており、癒頓の遠側と近側の回腸の直徑の割合は4對1であつた。胃石の近くで腸を切開を行い胃石一箇を摘出した、大きさ  $40 \times 41 \times 56$  mm であつた、外形は橢圓形、重さ約70 gm。

第二回手術(1973年1月22日)、一回目手術後二週間は経過良好であつたが、2週間後突然前回と同じ嘔吐、腹痛などの症状を呈した。開腹手術を行うと回腸の ileocaecal valve より1.5メタの所に前回と同様の胃石一箇の癒頓がみられたので、これを摘出した、大きさ  $40 \times 41 \times 52$  mm、重さ68 gm、外形は橢圓形であつた。また術中胃を觸診すると鷄卵大の異

物をふれ、胃體部前壁を切開して、胃石一箇を摘出した、大きさ約45×56×60mm、重さ95gm、外形は長橢圓形であつた。術後経過は良好であつた。

### 〈討論〉

術後患者の言葉によると、發症する三、四か月前、患者はオオイタビの實を比較的多量に攝取したという。摘出された胃石は寫眞Ⅱに示してある。

しかし、繩田ら(1962年)により報告されたオオイタビによる胃石の形成は Shibuoil に關與しないで、ある種類の Sticky material、即ち heterphysaccharide (Plant mucilage) が胃酸の作用でオオイタビの實の纖維質と結合して胃石を作ると述べている。本例は Shibuoil 及び Tannin 以外の因子によつてオオイタビが胃石を形成した症例で文献の考案して加えてここに症例を報告した。

### 〈文獻〉

- ① Hamidi, H: Drei Herto-oder phytobezoarfälle Deutsche Med. Wschre 52,2122, 1926.
- ② 泉正一、岩本正樹、石田吉治: 植物胃石殊に果實結石竝に其の結成機轉に就て。日本消化器病學會雜誌 30, 263, 1931。
- ③ 岩城達: 植物性腸石に因る腸閉塞症の一例。日外寶函 9, 629, 1932。
- ④ 泉正一、石田吉治: 植物胃石殊に果實結石竝に其の結石機轉に就ての續報。日本消化器病學會雜誌 31, 27, 1932。
- ⑤ 森節也: 胃石の一例に就て。日外會誌 43, 1463, 1943。
- ⑥ Asquith R.S.: paper Chromatography of the pyrogallol Tannins. Nature 168,738, 1951.
- ⑦ 石川一策: 最近經驗した胃石の一例、山形縣醫師會報 6, 23, 1951。
- ⑧ 牧野富太郎: 日本植物圖鑑 北隆館 東京 648, 1952。
- ⑨ 大井次三郎: 日本植物誌 至文堂 東京 432, 1953。
- ⑩ 小堀純一、蛇島一登: 植物性胃石症の一治驗例。鹿兒島醫學雜誌 6, 191, 1953。
- ⑪ 槇哲夫: 潰瘍を伴へる胃内柿結石手術治

驗例。日本消化器病學會雜誌 34, 26, 1955。

⑫ 今重幸雄、久留克己: 胃石を合併せる胃潰瘍症について 鹿兒島醫學雜誌 30, 638, 1957。

⑬ Senro Nawata, Akira Kobayashi and Syunichi Kamimura: on the phytobezoar from oetabe and its Gastro-lith formation 4, 105, 1962.

